

ドイツ民族主義と北欧

「郷土芸術運動 (Heimatkunstbewegung)」と「血と大地文学 (Blut- und Boden-Literatur)」 における北欧文学の受容

発表者：中丸 禎子 (東京理科大学非常勤講師)
於：明治大学駿河台校舎 D 会場
2009年5月30日 (土)

1. 導入

- ・ドイツ・北欧の交流→牧歌的な北欧像
 - ・北欧語のドイツ語訳
 - ・ドイツ文学に北欧文学が与えた影響
- (例1) リルケ (Rainer Maria Rilke, 1875-1926) : イェンス・ペーター・ヤコブセン (Jens Peter Jacobsen, 1847-85, D*) を愛読 (=「聖書と並ぶ重要書」)。『ニイルス・リイネ』(Niels Lyhne, 1880) に触発されて『マルテの手記』(Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge, 1910) を執筆。
- (例2) トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) : 『ブッデンブローク家の人々』(Buddenbrooks, 1901) と、アレクサンデル・シエラン (Alexander Kielland, 1849-1906, N) 『ガルマンとウォルセ』(Garman och Worsø, 1880; de: Garman und Worsø, 1881) の間に共通点 (商家の系譜物語、語りの文体、イロニーの用い方)。
- (例3) ドイツで人気のあった他の北欧作家 : ゲオーア・ブランデス (Georg Brandes, 1842-1927, D)、アルネ・ガルボルイ (Arne Garborg, 1851-1924, N)、ヨナス・リー (Jonas Lie, 1833-1900, N)、ビョルンステルネ・ビョルンソン (Bjørnstjerne Bjørnson, 1832-1900, N)、アウグスト・ストリンデルベリ (August Strindberg, 1849-1912, S) (全員がドイツに居住経験)
- (例4) ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) : ブランデス『貴族的急進主義』(Aristokratisk Radikalisme, 1884 (連続公開講義); 1889 (刊行); de: Aristokratischer Radicalismus. Eine Abhandlung über Friedrich Nietzsche, 1890)、オーラ・ハンソン (Ola Hansson, 1860-1925, S) 『フリードリヒ・ニーチェ その個性と体系』(Friedrich Nietzsche -seine Persönlichkeit und sein System, 1889) (ニーチェについてドイツ語で書かれた最初の刊行物) →ドイツおよびヨーロッパでの注目の契機
- *作家名の生没年の後ろにある略号は、D=デンマーク、N=ノルウェー、S=スウェーデン

2. ドイツにおける北欧受容

- ・自然主義 (1880年代)、新ロマン主義 (1890年代~1910年ごろ)
 - ・郷土芸術運動 (Heimatkunstbewegung, 1890-1918)、血と大地文学 (Blut- und Boden- Literatur, 1918-33)、ナチズム (1933-45)
 - ・1871年 ドイツ帝国成立 (ヴィルヘルム一世 (Wilhelm I, 1797-1888; 1871-88))
社会主義者鎮圧法 (Sozialistengesetz; Gesetz gegen die gemeingefährlichen Bestrebungen der Sozialdemokratie) (ビスマルク (Otto von Bismarck, 1815-1898; 1871-90))
 - ・自然主義文学←北欧の「八十年代」文学 (※)
- (例1) イプセン (Henrik Ibsen, 1828-1906, N) : ベルリンに居住。ベルリン=イプセンの街=世界一の演劇都市 (Arfred Kerr)。ベルリンの「自由劇場 (Freie Bühne)」の最初の公演は、イプセン『幽霊』(Gengangere, 1881; de: Gespenster, 1884)。レクラム、フィッシャーそれぞれから翻訳刊行。1889年から1904年にかけて全集刊行。
- (例2) ブランデス : 『十九世紀文学主潮』(Hovedstrømninger i det 19de Aarhundredes Litteratur, 1871; de: Hauptströmungen in der Literatur des 19. Jahrhunderts, 1872) がドイツ自然主義の理論的支柱。1. (例4) も参照。
- ※「八十年代 (ättitalet)」文学 : 北欧の1870年代から1880年代に興った自然主義的文学
- [背景]・1870年代以降の急激な近代化 (蒸気機関の発達 (鉄工業の変化、交通網の発達)、移民、都市化、農村の空洞化、家父長制的な社会構造の動揺、商業・金融業の発達、中産市民階級の台頭、政治

の民主化)・メディアの発達(大手新聞、出版社の設立)

- ・西欧文学・思想の影響：チャールズ・ダーウィン(Charls Darwin, 1809-1882)、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)、オーギュスト・コント(Auguste Comte, 1798-1857)、イポリート・テーヌ(Hippolyte Taine, 1828-1893)、ルートヴィヒ・アンドレアス・フォイエルバッハ(Ludwig Andreas Feuerbach, 1804-1872)、アレクサンドル・デュマ(Alexandre Dumas, 1802-1870)、チャールズ・ディケンズ(Charls Dickens, 1812-1870)、ジェームズ・クーパー(James Cooper, 1789-1851)、コナン・ドイル(Arthur Conan Doyle, 1859-1930)

[特徴]・進歩主義、啓蒙主義、科学中心主義、自然主義

- ・後期ロマン主義文学、ビーダーマイアー文学を批判
- ・女性作家がデビュー、家族制度、恋愛・結婚に関する倫理、男性性・女性性がテーマに

- [代表作家]
- ・デンマーク：ブランデス、ヤコブセン、ホルゲル・ドラックマン(Holger Drachmann, 1846-1908)、ヘルマン・バング(Hermann Bang, 1857-1912)、ヘンリック・ポントピダン(Henrik Pontoppidan, 1857-1943)
 - ・ノルウェー：ビョルンソン、イブセン、リー
 - ・スウェーデン：ストリンドベルイ、アン・シャルロッテ・レフラー(Anne Charlotte Leffler, 1849-1892)、ヴィクトリア・ベネディクトソン(Victoria Benedictsson, 1850-1888)、ハンソン
(既出の作家はファーストネーム、綴り、生没年を略)

- ・1888年 ヴィルヘルム二世(Wilhelm II, 1859-1941; 1888-1918) 戴冠→保守化、自然主義文学の弾圧
- ・自然主義への批判
- ・ギュスターヴ・フローベール(Gustav Flaubert, 1821-80)、シャルル・ボードレール(Charles Pierre Baudelaire, 1821-67)などフランス文学の影響
- ・新ロマン主義、郷土芸術運動←北欧の「九十年代」文学(※※)、探検家スヴェン・ヘディン(Sven Hedin, 1865-1952)
- ・クヌート・ハムスン(Knut Hamsun, 1859-1952, N)『神秘』(Mysterier, 1892; *Mysterien*, 1894)：「男らしさ(Mannhaftigkeit)」、「好戦性(Kampflust)」などの「ゲルマン民族気質(Germamische)」
- ・「資本主義化以前の牧歌(präkapitalistische Idylle)」

(※※)「九十年代(nittitalet)」文学：北欧の1880年代末から1910年頃に興った反自然主義的文学

[背景]・政治の保守化

- ・ニーチェ、フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)の影響

[特徴]・デカダンス、個人主義、人間の精神への関心

- ・「目に見えないもの」(心理、魂、美、神秘、宗教、過去、自然)
- ・ナショナリズム、民族主義の高揚→カール・ラーション(Carl Larsson, 1853-1919)、アンデシュ・ソルン(Anders Zorn, 1860-1920)の絵画人気(ダーラナ地方=「スウェーデン人の心のふるさと」)、「国旗の日」(6月6日、後の建国記念日)、「スカンセン野外博物館」
- ・民謡の韻・音律・独特の比喻表現

- [代表的作家]
- ・スウェーデン：ヴェルナー・フォン・ヘイデンスタム(Verner von Heidenstam, 1859-1940)、セルマ・ラーゲルレーヴ(Selma Lagerlöf, 1858-1940)、エリック・アクセル・カールフェルド(Erik Axel Karlfeldt, 1864-1931)、オスカル・レーヴァーティン(Oscar Levertin, 1862-1906)、グスタヴ・フレディンク(Gustaf Fröding, 1860-1911)、ヤルマル・セーデルベルイ(Hjalmar Söderberg, 1869-1941)
 - ・デンマーク：ヘルゲ・ローデ(Helge Rode, 1870-1937)、ヴィゴ・ストウッケンバリ(Viggo Stuckenber, 1863-1905)、ヨハネス・イェルゲンセン(Johannes Jørgensen, 1866-1956)、ソフス・クラウセン(Sophus Claussen, 1865-1931)
 - ・ノルウェー：ハムスン、シグビョルン・オブストフェルダール(Sigbjørn Obstfelder, 1866-1900)、ニルス・コレット・フォグト(Nils Collet Vogt, 1864-1937)、ヴィルヘルム・クラグ(Vilhelm Krag, 1871-1933)

- ・アイスランド：シグルドゥル・シグルズソン (Sigurður Sigurðsson, 1879-1939)、フルダ・シグルズソン (Hulda Sigurðsson, 1881-1946)、ヨハン・G・シグルズソン (Jóhan G Sigurðsson, 1882-1906)

郷土芸術運動

- ・雑誌〈郷土〉(*Heimat*, 1900-04)：郷土芸術 (Heimatkunst) ⇔大都市芸術 (Großstadtkunst)
- ・「ベルリンから離脱せよ (Los von Berlin)」
- ・フリードリヒ・リーンハルト (Friedrich Lienhard, 1865-1929) 『ワイマールへの道』 (*Weg nach Weimar*, 1905-08)：平板化された工業主義・社会主義に対して、「魂と精神の力」としてのワイマールを賞賛。ブルジョワ的教養趣味。20世紀のゲーテ崇拝に影響大。
- ・アドルフ・バルテルス (Adolf Bartels, 1862-1945) 『ディトマルシェンの人々』 (*Die Dithmarcher*, 1898)：ディトマルシェン (作者の出身地。デンマークとの国境ホルシュタイン地方の西海岸に位置し、中世後期には農民共和国だったとされる) における16世紀の対デンマーク農民戦争の敗戦を、「文明の力と戦う民衆の力の英雄的闘争」として描いた作品。
- ・グスタヴ・フレンセン (Gustav Frenssen, 1863-1945) 『イェルン・ウール』 (*Jörn Uhl*, 1901)：『イエスタ・ベルリングのサガ』に触発されて書かれた。「プレ・ファシズム文学 (präfaschistische Werke)」の代表的作品→運命の甘受、意味の追求、内面への埋没。ホルシュタインの農夫の息子を主人公とした教養小説的な作品。読者に向けた語り口調を特徴とし、半世紀で五十万部を売り上げた。
- ・工業化により、農村での生活基盤を失い、都市に流出した人々が、運命に潜む「意味」を追求
- ・「農民」の神話化、「大地」との結びつきを重視

血と大地文学

- ・ユリウス・ラングベーン (Julius Langbehn, 1851-1907) 『教育者としてのレンブラント』 (*Rembrandt als Erzieher*, 1890)：「ナチズムの古典」。故郷、「ドイツ性」、匿名性
- ・ゲルマン民族の「血」、祖国・郷土の「大地」

3. ドイツにおけるラーゲルレーヴ受容

- ・ドイツ＝「北欧以外でラーゲルレーヴがもっともよく知られる国」(J.ワトソン)
 - ・生前に全集が三度、作品集が二度刊行
 - ・1980年までに、240冊の単行本刊行
 - ・ほぼすべての作品が翻訳されている
- (例1) グスタヴ・フレンセン (Gustav Frenssen, 1863-1945、「郷土芸術運動」の代表的作家)：『イエスタ・ベルリングのサガ』 (*Gösta Berlings saga*, 1891) に触発されて、代表作『イェルン・ウール』 (*Jörn Uhl*, 1901) を執筆。
- (例2) イナ・ザイデル (Ina Seidel, 1885-1974、「最も重要なドイツ・プロテスタント作家の一人」)：『イエスタ・ベルリングのサガ』を戯曲化。
- (例3) フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924)：1912年(『変身』(*Die Verwandlung*)執筆年)日記で二度、フェリーチェ・パウアーへの手紙で一度、ラーゲルレーヴに言及。
- (例4) ゲルハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946)：ラーゲルレーヴの散文作品『アルネ師の宝』 (*Herr Arnes penningar*, 1903) を、『冬のバラード』 (*Winterbalade*, 1917) というタイトルで戯曲化 (後、ラーゲルレーヴによりスウェーデン語訳)。
- (例5) ベルトルト・ブレヒト (Bertolt Brecht, 1898-1956)：『イエスタ・ベルリングのサガ』をブルジョワ文学として批判し、同作の「反対構想 (Gegenentwurf)」を戯曲化 (未完)。
- (例6) ネリー・ザックス (Nelly Sachs, 1891-1970)：十代のころから愛読者としてラーゲルレーヴと文通、作家としてデビューしてからは、作品も送っていた。ザックスの未出版の自伝『ヒェリオン—子ども時代の物語』 (*Chelion. Eine Kindheitsgeschichte*) が、ラーゲルレーヴの自伝『モールバック』 (*Mårbacka*, 1926) に酷似。1940年、母とともにスウェーデンに亡命。
- (例7) ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962)、トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955)：ラーゲルレーヴに手紙

- ・ 翻訳・翻案時の「牧歌化」→パウリーネ・クライバー=ゴットシャウ (Pauline Kläiber=Gottschau, 1855-1944) のドイツ語訳、初期の無許可翻訳
- ・ ラーゲルレーヴのナチズム批判：『地球儀の話』(Skriften på jordgolvet, 1933) で反・反ユダヤ主義を表明、収益をユダヤ人の亡命のために寄付、ネリー・ザックス亡命に尽力
- ・ ナチスによる大々的な受容＝「ユダヤ人と共産主義者に毒される以前の健康で素朴なゲルマン的生」ナチス政権下で 12 作品刊行
 - ・ 『アルネ師の宝』(Herr Arnes preeningar, 1903; de: Herrn Arnes Schatz, 1904)：国防軍出版部 (Wehrmachtausgabe) から刊行 (1943)
 - ・ 『イェスタ・ベルリングのサガ』(Gösta Berlings saga, 1891; de: Gösta Berling, 1896)：戦線出版局 (Frontbuchhandler Ausgabe) から刊行 (1944)
- ・ ドイツの民族ナショナリズムの雑誌で紹介：〈新文学〉(Die Neue Literatur)、〈文学〉(Die Literatur)、〈高地〉(Hochland)、〈北欧〉(Der Norden)
- ・ スウェーデンの民族ナショナリズムでの受容：雑誌〈スウェーデン・ドイツ〉(Sverige-Tyskland)
- ・ NSDAP のスウェーデン支部 (Landesgruppe Schweden der NSDAP) から作品刊行、収益はナチスによる「冬期貧民救済事業 (Winterhilfswerk)」に使用。

4. ラーゲルレーヴ『エルサレム』におけるドイツ民族主義との共通点

- ・ 『エルサレム』(Jerusalem, 1901-02)：スウェーデンの宗教運動 (1896 年)、ダーラナ地方 (2. 「九十年代」文学の説明参照)、主人公は農夫イングマル・イングマルソン (Ingumar Ingmarsson) (※※※) (※※※)「イングマルソン」は、姓ではなく「父称 (fadersnamn / patronymikon)」で、「イングマルの息子」の意。
- ・ 「美しい盲の馬」の呪い→「美しく賢い (vacker och klok)」娘と「盲で白痴 (blind och idiot)」の息子
- ・ 予型：本編 イングマル・イングマルソン—妻バルブロ・スヴェンストッテル (Barbro Svendsdotter)
 - ⇩
 - 導入部 イングマル・イングマルソン (父)—妻「ベルイスクーグのブリッタ」(Brita i Bergskog)
- ・ 啓蒙・善行→障害者を血筋から排除

【引用】

—お医者様に聞いたわ、そして今はそれが本当のことだと知ってる。

彼女は腕を天に伸ばした。とらわれていた鳥が自由を取り戻し、翼を広げたようだった。あなたは、イングマル、不幸なんて知らないでしょ、彼女は言った。それは誰も知らないのよ。

—バルブロ、イングマルは言った。ぼくたちの将来のことを、あなたに話してもいいかな？

彼女は彼の言うことを聞いていなかった。彼女は手を組み、神に感謝し始めた、彼女は低く、ふるえる声で語ったが、イングマルには彼女の言うことがしっかりと聞こえた。呪われた子どものことでわずらっていたあらゆる憂いを、彼女は今、神に告白し、そして感謝した。なぜなら、彼女の子どもはほかの皆と同じようになり、彼女は彼が遊び、跳ね回るのを見ることができ、彼が学校に行って読み書きを習うのを見ることができ、彼は斧を操り鋤の後ろを行く強い若者になり、妻を得て家長として古い屋敷に住むことができるだろうからだ。

Jerusalem II, s.260 (S. 506)

参考文献

- ・ Selma Lagerlöf: *Jerusalem I. I Dalarne*. Stockholm (Albert Bonniers Förlag AB) 1981
Jerusalem II. I det heliga landet. Stockholm (Albert Bonniers Förlag AB) 1981
- ・ Selma Lagerlöf: *Jerusalem. Roman*. Übers. v. Pauline Kläiber-Gottschau und Sophie Angermann. Mit einem Geleitwort von Ina Seidel. 1 Aufl. München (Econ Ullstein List Verlag GmbH & Co. KG) 2001 (©1955 by Nymphenburger in der F. A. Herbig, Verlagsbuchhandlung GmbH, München)

- Karl Rainer von der Ahé: *Rezeption schwedischer Literatur in Deutschland 1933-1945*. Hattingen (Verlag Dr. Bernhard Kretschmer) 1982
- Barbara Gentikow: *Skandinavien als präkapitalistische Idylle. Rezeption gesellschaftskritischer Literatur in deutschen Zeitschriften 1870 bis 1914*, Neumünster(Karl Wachholtz Verlag) 1978
- Jürg Glauser (Hg.): *Skandinavische Literaturgeschichte*. Stuttgart; Weimar (J. B. Metzler) 2006
- Uwe-K. Ketelsen: *Völkisch-nationale und nationalsozialistische Literatur in Deutschland 1890-1945*. Sammlung Metzler Band 142. Stuttgart (J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung) 1976
- Fritz Paul (Hg.): *Grundzüge der neueren skandinavischen Literaturen*. 2.Aufl. Darmstadt(Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1991
- Rudolf Radler (Hg.): *Kindlers Neues Literaturlexikon*. Bd.5. München (Kindler Verlag) 1989, S. 804-805
- Regina Quant: *Schwedische Literatur in deutscher Übersetzung 1830-1980. Eine Bibliographie*. Fritz Paul, Heinz-Georg Halbe (Hg.).Göttingen (Vandenhoeck&Ruprecht) 1987, S.1226-1383
- Jennifer Watson: *Swedish Novelist Selma Lagerlöf, 1858-1940, and Germany at the turn of the century. O du Stern ob meinem Garten*. Scandinavian Studies Vol.12. Lewiston/Queenston/Lampeter (The Edwin Mellen Press) 2004
- Andrew Wawn, *The post-medieval reception of old Norse and old Icelandic literature*. In: R. McTurk (ed.), *A companion to old Norse-Icelandic literature and culture*. Oxford: Blackwell, 2005, p. 328-39
- 濱崎一敏 『ドイツ・ファシズム文学の展開—ドイツ統一からワイマール期まで—』、長崎大学教養学部紀要（人文科学篇）第31巻第1号、1990年7月、89～104 ページ
- 濱崎一敏 『「郷土芸術」の思想的背景—J. ラングベーンとA. バルテルス—』、長崎大学教養学部紀要（人文科学篇）第36巻第1号、1995年7月、1～26 ページ